

卵生化鳥

辻 憲男（文学部教授）

「三界四生に輪廻して、わたし、次に生れてくるときは、もう人間は飽きたから、ぜひとも卵生したいと思っているのです」/「卵生」/「そう、鳥みたいに蛇みたいに生れるの。おもしろいでしょう」。そういうと、薬子（くすこ）はつと立ちあがって、枕もとの御厨子棚から何か光るものを手にとるや、それを暗い庭に向ってほうり投げて、うたうように、「そうれ、天竺まで飛んでゆけ」。その不思議なふるまいに、親王は好奇心いっぱいの目を輝かせて、「なに、なにを投げたの。ねえ、教えて」。薬子は事もなげに笑って、「あれがここから天竺まで飛んでいって、森の中で五十年ばかり月の光にあたためられると、その中からわたしが鳥になって生れてくるのです」（澁澤龍彦『高丘親王航海記』）。

史実の高丘親王は非運の王子である。政変の後、空海に就いて密教を学んだ。東大寺の大仏修理に力を尽くした。晩年に唐に渡り、865年天竺へ向かう途中、羅越国で消息を絶った。志なかば、病気とも虎に襲われたともいう。老齡の親王を天竺へ駆り立てたものは何だったのか。小説家はそれを、幼時に父の寵姫・薬子から聞いた、甘美な寝物語だったと想像した。漂流船のような親王の夢の中に、果たして鳥の姿をした薬子が飛んで来た…。

羅越国は今のマレー半島の南端、シンガポールあたりという。ところで太平洋戦争中の昭和17年、日本軍は同地に侵攻した。翌年、国内の小学校の歴史教科書に高丘親王が紹介され、その“雄飛”をたたえる伝記等が出版された。親王のあつい求法の心とは無縁の、戦争拡大の狂熱が南洋上を覆っていた。



高丘親王の住んだ超昇寺は、平城旧都の北辺。
奈良市佐紀町。